

## “有”構文の諸相および「時空間存在文」の特性

木村 英樹

### 1. はじめに——「存在文」の特立に関わる問題点

中国語の存在表現を担う基本的な構文は、“有”を述語動詞とし、存在対象を目的語の位置に置くかたちで構成される。それを、ここでは刘月华等1983に倣って「“有”構文」と呼ぶ。“有”構文は、具象的・可視的な対象の存在から抽象的・概念的な対象の存在まで、さまざまな意味での〈存在〉を表す。たとえば(1)は特定の空間における具象物の可視的な存在を表し、(2)はある種の行為に内在する質的属性の存在を表し、(3)は特定の事物に内在する量的属性の存在を表している。

(1) 花盆旁边儿 有 一 块 石头。

植木鉢-そば ある 1 CLF 石

[植木鉢のそばに石がひとつあります。]

(2) 吸烟 有 很多 坏处。[喫煙には多くの弊害があります。]

喫煙 ある たくさん 弊害

(3) 他 有 一 米 八。[彼は(身長が)1メートル80あります。]

彼 ある 1 CLF 8

三つの文が表す事柄をより自然な日本語文で表そうとするなら、それぞれの文に付した日本語訳がそうであるように、いずれも「ある」を述語動詞としながらも、構文のかたちは「XにYがある」、「XにはYがある」、「XはYある」の3通りに分かれる。つまり、三つの文が表す〈存在〉は、日本語においてはそれぞれ異なるタイプの〈存在〉として概念化されており、その相違が構文のかたちに反映されていると考えられる。しかし、中国語においては、いずれも「名詞(または名詞相当句) + “有” + 名詞(ま

たは名詞相当句)」という、少なくとも見かけ上は同型の構文によって表現される。

このように多様な〈存在〉を表す“有”構文のなかにあつて、他の“有”構文のタイプとは区別され、特別な名称を与えられている構文がある。いわゆる「存在文」（“存在句”）である。「存在文」とは、一般には、次のような特徴をもつ構文として記述されている<sup>1)</sup>。

#### (4) 「存在文」に関する一般的理解

意味的特徴：特定の時空間における事物の存在を表す。

構造的特徴：(i) 場所詞（句）または時間詞（句）が主語の位置に立つ。

(ii) 存在対象が目的語の位置に立つ。

(iii) 目的語は通常、不定（indefinite）名詞句。一般に（数）量詞を伴い、裸名詞は不可。

すなわち、「存在文」とは、特定の空間もしくは時間において何らかの事物が存在することを表す構文であり、構造的には二つの項をもつ2項文である；2項のうち1項は、場所詞（句）から成る空間表現もしくは時間詞（句）から成る時間表現であり、もう1項は名詞句から成る存在対象である；時空間の項を担う場所詞（句）または時間詞（句）は主語の位置に置かれ、存在対象の項を担う名詞句は目的語の位置に置かれる；目的語の名詞句は、通常、数量詞または量詞を伴う不定（indefinite）名詞句であり、数量詞も量詞も伴わないいわゆる裸名詞や定（definite）名詞句であつてはならない。現行の多くのテキストや主要な文法書の記述に見られる「存在文」の特性に関する一般的な理解は、凡そこのようなものであり、先の(1)や次の(5)(6)のような例がその典型とされる。

(5) 铁笼子里 有 一 只 熊猫。

---

1) 広義の「存在文」には、“墙上挂着一副画儿。”[壁に一枚の絵が掛かっている]のように、述語動詞が「一般動詞+“着”」のかたちから成る描写性の高いタイプの構文も含まれるが、本稿では、「存在文」の基本形として“有”を述語動詞とするタイプの構文のみを扱う。

檻-なか ある 1 CLF パンダ

[檻の中にパンダが一頭います。]

(6) 从前 有 座 山, 山上住着一群土匪。有一天, ……

かつて ある CLF 山

[むかし, ある山がありまして, 山には匪賊が住んでいました。

ある日, ……]

冒頭にも述べた通り, “有” 構文は存在対象を目的語の位置に置くかたちで構成される構文であり, 従って, (4) に要約された構造的特徴のうちの (ii) は“有” 構文全般に共通する特徴であって, 「存在文」に限ったものではない。「存在文」を他の“有” 構文と劃して顕著に特徴づけているのは (i) と (iii), すなわち主語と目的語に関わる制約である。

まず主語について言えば, 「存在文」の主語は一般名詞 (句) ではなく, 必ず場所詞 (句) または時間詞 (句) でなければならない<sup>2)</sup>。仮に (5) の主語の“铁笼子里” [檻のなか] から方位詞の“里” [なか] を削除し, 一般名詞の“铁笼子” [檻] に置き換えると, たちまち非文となる。(5)' は明らかに不自然である。

(5)' \*铁笼子 有 一 只 熊猫。

このように, 「存在文」の主語は一般名詞 (句) であってはならない。他の“有” 構文の主語は, (2) の“吸烟” や (3) の“他” がそうであるように, 一般名詞 (句) であって何ら問題はない。まずこの点において「存在文」は特殊であるとされる。

尤も, 「存在文」と呼ばれる構文が, 意味的特徴として「特定の時空間

2) 「存在文」の範囲をより広く捉え, (2) や (3) のように場所詞や時間詞を主語とはしないタイプの“有” 構文も広く「存在文」とみなす立場もあるが, 現行のテキストや主要な文法書を見る限り, (1) や (5) や (6) のように, 場所詞あるいは時間詞を主語とするタイプの“有” 構文のみを「存在文」と呼ぶ立場がより一般的である。たとえば, 刘月华等 1983: 436 でも「存在文」の構造は「处所词语 / 时间词语 + “有” + 名词 (表示存在的事物)」と記述されており, 場所詞や時間詞が主語に立つものだけが「存在文」と規定されている。

に何らかの事物が存在することを表す」ものであるなら、時空間を示す表現が必須の項としてその構成要素になることはむしろ当然のことであり、言わば意味的必然であると言える。そして、一方の必須項である存在対象が目的語の位置に立つことが“有”構文一般の構造特性であるなら、いま一つの必須項である時空間表現が主語の位置に納まるという現象それ自体は、少なくとも共時論の観点から現代中国語の構文論を考える上では、特段に「特殊」な現象とも考えられない。特定の時空間について存在の状況を語ろうとする文の主語が時間詞（句）もしくは場所詞（句）であることと、たとえば人の発話行為を述べようとする文の主語が人間名詞（句）であることとの間に取り立てて述べるほどの差はないということである。

それに対して、目的語の特徴の方は俄かには説明が得難く、「特殊」の度合いは主語の場合よりも大きい。まず言語事実として、先の(5)の目的語を固有名詞の“陵陵”に置き換えた(7)は明らかに不自然であり、また、数量詞を伴わない“熊猫”に置き換えた(8)も独立文としては極めて座りが悪く感じられる。時空間表現が主語に立つ“有”構文の目的語は、確かに「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であり、定名詞句や裸名詞とは相性が悪い。

(7) \*铁笼子里 有 陵陵。[檻の中にリンリンがいます。]

檻-なか ある リンリン

(8) ??铁笼子里 有 熊猫。[檻の中にパンダがいます。]

檻-なか ある パンダ

この種の構文的制約は、他の“有”構文の目的語には必ずしも働かない。(9)は先の(2)の目的語を定名詞句（“这些坏处”）に置き換えたものであり、(10)はいわゆる所有の関係を表す“有”構文が裸名詞（“电脑”）を目的語に取る例であるが、いずれも極めて自然な表現として成立する。してみると、「存在文」は“有”構文のなかにあって確かに「特殊」なタイプであると言える。

(9) 吸烟 有 这些 坏处。

喫煙 ある これら 弊害

[喫煙にはこれだけの弊害があります。]

(10) (你放心吧!) 我 有 电脑。

私 ある コンピューター

[(安心して!) 私にはパソコンがあります/私はパソコンをもっています。]

問題は、このように、“有”構文のなかにあつて「特殊」とされる「存在文」の目的語の特性が、主語の場合とは異なり、「存在文」自身の構文的意味からの当然の帰結とは理解し難いという点にある。すなわち、存在対象を表す目的語が「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であることは、文が「特定の時空間に何らかの事物が存在することを表す」ことの意味的必然とは考えにくいということである。現に、日本語の存在表現においては、次の例のように、存在対象が定名詞で表される場合も、裸名詞で表される場合も、どちらも無理なく成立する。

(11) 檻の中にリンリンがいます。

(12) 檻の中にパンダがいます。

日本語では(11)も(12)も無理なく成立するのに対して、中国語の(7)と(8)が不自然とされるのはなぜか? 中国語においては、なにゆえ、時空間詞(句)が主語に立つタイプの“有”構文に限って、存在表現が「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」でなければならないのか? その意味論的根拠を明らかにすることが本稿の目的の一つである。

上の問いに対して予め想定されるのは、中国語の「存在文」とはそもそも不定の事物——すなわち、「或る何か」あるいは「或る誰か」——の存在を述べるための構文であり、従つて、存在対象が不定名詞句であるのは当然のことであるといった趣旨の解答である。この解答が妥当であるなら、もはやこれ以上の議論は必要ではなくなる。しかし、事実それほど単純ではない。なぜなら、「存在文」の目的語に関する従来<sup>レ</sup>の記述は、(4)の(iii)にあるように、「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であつて、「必ず、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」ではないからである。刘月华等 1983 は堅実かつ慎重な記述で知られるが、そこでも「存在文の目的語は多くは不定であり、かつ、一般に裸名詞であつてはならない(“存在句的宾语多为无定的, 而且一般不能是单个名词”)」(刘月华等

1983: 458) と記されている。「多くは不定」であり、「一般に裸名詞」であるという記述は、裏返せば、時空間(句)が主語に立つ“有”構文であっても、存在対象を表す目的語が定名詞(句)である場合や裸名詞である場合もあり得ることを含意する。確かに、現実のコーパスにはそのような例が少なからず観察される。次の4例は主語(二重波線)がすべて特定の空間を示す場所詞(句)から成り、文全体は事物の存在を述べているが、(13)では定名詞句の“我爱人”が、(14)では固有名詞の“郭锐, 沈阳, 袁毓林”が、(15)と(16)では裸名詞の“水”と“四不像”がそれぞれ目的語に用いられている。

- (13) 家里 情况 挺 好的, 有 一 老人, 有 我  
 いえ-なか 状況 とっても よいPART ある 1 年寄り ある 私  
爱人, 有 两 个 小孩儿。(《当代北京口语语料 东城》)  
 妻 ある 2 CLF 子供  
 [家のなかはうまく行っていて、年寄りが一人いて、女房がいて、子供が二人いた。]
- (14) 北大中文系 有 郭锐、沈阳、袁毓林。  
 北大中文学科 ある 郭锐 沈阳 袁毓林  
 [北京大学中文学科には郭锐と沈阳と袁毓林がいます。]
- (15) (乌鸦看见一个瓶子。) 瓶子里 有 水。(《小学语文》)  
 瓶-なか ある 水  
 [(カラスには一本の瓶が見えた。) 瓶のなかには水があった。]
- (16) 中国 有 四不像。[中国にはシフゾウがいます。]  
中国 ある シフゾウ

先の(7)と(8)については不自然だと反応した複数のインフォマントも、上の4例については不自然さを感じないという。いずれも時空間詞(句)を主語とし、事物の存在を表す文でありながら、(7)と(8)は不自然であり、(13)から(16)の4例は自然だという事実をどう理解すればよいのか。刘月华等 1983 も含めて従来の論考や文法書はその点を明確にしていない。「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」とされる「存在文」の目的語は、いかなる場合に定名詞(句)や裸名詞であってもよい

のか。そのことを明らかにすることが本稿のもう一つの目的である。

以上述べた「存在文」の目的語に関する従来の記述の問題点を要約すると、次のようになる。

問題点その1 —— “有”構文のなかにあつて、時空間詞（句）が主語に立つタイプの“有”構文（すなわち「存在文」）に限り、存在対象を表す目的語が「通常、数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であるのはなぜか？

問題点その2 —— 時空間詞（句）が主語に立つタイプの“有”構文（すなわち「存在文」）は、いかなる場合に目的語が定名詞（句）であってもよいのか？ また、いかなる場合に裸名詞であってもよいのか？

本稿は、この二つの問い対して妥当な解を求めることを目的とする。併せて、従来の「存在文」に対する一般的な理解を“有”構文全体のなかで見直し、「存在文」およびそのサブ・カテゴリーとして提案される「時空間存在文」の新たな構文論的位置づけを試みる。

## 2. “有”構文が表す〈存在〉の諸相

前節の最後で示した二つの問題点は、「あり得る状況」として少なくとも二つの可能性を示唆していると考えられる。一つは、「存在文」の目的語は、基本的には「数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であるが、なんらかの条件——機能論的な条件や語用論的な条件など——が加わることによって、定名詞（句）や裸名詞が用いられることも可能になるという状況である。言い換えれば、何らかの意味で有標の「存在文」においては、目的語が定名詞（句）や裸名詞であることも可能になるということである。いま一つは、これまで「存在文」として一括りにされてきた構文には、実は、典型的な「存在文」と非典型的な「存在文」という複数のカテゴリーが存在し、典型的な「存在文」の目的語は必ず「数量詞または量詞を伴う不定名詞句」であるが、非典型的な「存在文」の目的語は定名詞（句）や裸名詞であってもよいという状況である。

仮に後者の状況が事実だとするならば、従来「存在文」と呼ばれてきた構

文の一部は、主語が時空間詞（句）であるという一点を除けば、「存在文」以外の“有”構文との間に特段の相違が認められなくなる。もしも、そのようなタイプの“有”構文——すなわち、時空間上の事物の存在を表しつつも、目的語の特徴は「存在文」以外の“有”構文と共通するという、そのようなタイプの“有”構文——が存在するとするなら、それはいかなる意味的特徴を有する構文であるのか。そして、それはいかなる点で「存在文」以外の“有”構文と近似し、また、いかなる点で典型的な「存在文」と相違するのか。「存在文」の内実をより精確に把握するには、それらの点を明らかにすることが必須の課題となるはずである。詰まるところ、“有”構文全体のなかで改めて「存在文」の特質を見直し、見極めるという作業が必要になるということである。

本節では、“有”構文の全体像とそのなかでの「存在文」の位置取りを明らかにすべく、2項文としての“有”構文全般を対象にしたタイプ分けを行う。分類に当たっては、従来の「存在文」の枠組みからはひとまず離れて、これまで等閑視されてきたいくつかの意味的要因を考慮し、主として存在対象の意味的特性と〈存在〉のあり方に着目する。以下、2項文としての“有”構文を8つのタイプに分類し、それぞれの特徴について見ていく。

## 2.1 【特定の時空間におけるリアルな具体物の存在】を表すタイプ（=タイプA）

“有”構文には、冒頭でも述べた通り、優れて具象的な、可視性の高い〈存在〉を表すタイプがある。すなわち、特定の時空間におけるリアルな具体物の実体的存在を表すタイプである。先に挙げた(1)(5)(6)(15)、さらには(21)(22)(23)(24)などの例がこれに該当する。

(17) (= (1)) 花盆旁边儿 有 一 块 石头。

植木鉢-そば ある 1 CLF 石

[植木鉢のそばに石がひとつあります。]

(18) (= (5)) 铁笼子里 有 一 只 熊猫。

檻-なか ある 1 CLF パンダ



[檻の中にパンダが一頭います。]

- (19) (= (6)) 从前 有 座 山, 山上住着一群土匪。有一天, ……  
 かつて ある CLF 山

[むかし, ある山がありまして, 山には匪賊が住んで  
 いました。ある日, ……]

- (20) (= (15)) 乌鸦看见一个瓶子。瓶子里 有 水。  
 瓶-なか ある 水

[カラスには一本の瓶が見えた。瓶のなかに水がある。]

- (21) 乌鸦看见旁边 有 许多 小石子, 想出了一个办法。  
 そば ある たくさん 小石

[カラスはそばにたくさんの石ころがあるのを見て, ある方法を  
 思いついた。]

- (22) 从前 有 个 小朋友, 他的眼睛里面起麦粒肿了,  
 かつて ある CLF 子供

于是他去医院动手术, ……

[以前ある坊やがいて, 目にもものもらいのできたので, 病院に手術  
 に行ったところ……]

- (23) 脑门上 有 几 条 很 深 的 皱纹。  
 額-表面 ある いくつか CLF とても 深い PART 皺

[額に何本か深い皺があります。]

- (24) 墙上 有 一 道 缝儿。[壁にひびが一本あります。]  
 壁-表面 ある 1 CLF ひび

話し手にとっての〈いま, ここ〉あるいは〈そのとき, その場〉というリアルな特定の時空間を仮に「実-時空間」と呼ぶなら, 上に挙げた8つの“有”構文はいずれも, 実-時空間にリアルな個体としての物や人が実体として存在することを表しており, その意味で, 〈現場性〉の強い, 〈知覚性〉に富んだ〈存在〉を表すタイプの構文といえることができる。ここではこのようなタイプの“有”構文をタイプAと呼ぶことにする。

なお, (23) と (24) では, 当該の空間から独立しては存在し得ない不可分な (inalienable) な対象の存在が述べられており, 空間から独立した

可分 (alienable) な対象の存在を述べている (17) や (18) とは些か状況が異なっている。「皺」も「ひび」も、「壁」や「額」から分離して自律的に存在するということが不可能な対象である。ここでは、「額」と「皺」、あるいは「壁」と「ひび」という、「地」と「図」の関係を以って不可分に存在する二つの事物が、空間存在の構図になぞらえて捉えられている。(17) や (18) が典型的な空間存在の表現だとするなら、(23) や (24) はメタフォリックな空間存在の表現であると言える。ともあれ、両文とも、リアルな空間にリアルな対象が存在するという具象的、知覚的な〈存在〉を語る構文であるという点においては (17) や (18) と等しく、いずれもタイプ A の一種と見ることができる。

## 2.2 【特定の時空間におけるリアルな状況の存在】を表すタイプ (= タイプ B)

タイプ A がいわゆるモノ——物と人を含めてのモノ——の存在を表すタイプであるのに対して、コトの存在、すなわち状況の存在を表すタイプの「有」構文がある。次の例のように、特定の時空間において、リアルな——多くは自然発生的な——状況が存在することを述べるタイプである。仮にタイプ B と呼ぶ。

(25) 外 有 雨。一只巨大的苍蝇飞进阳台来躲雨。

外 ある 雨

[外は雨。一匹の大きな蠅が雨宿りをしにバルコニーの中に入ってきた。]

(26) 下班出去的时候才发现外面 有 雪。

外 ある 雪

[仕事を終えて外に出た時にはじめて外が雪だということに気づいた。]

(27) 今天 有 雨夹雪。[今日はみぞれが降る。]

今日 ある みぞれ

(28) 火车站 有 情况。[駅に異状が発生した。]

駅 ある 異状

いずれの文も実-時空間における知覚的な状況を述べているという点において、タイプAと共通する。ただし、〈いま、ここ〉限りの、あるいは〈そのとき、その場〉限りの一回性の事象を述べているという点において、タイプBは〈出来事性〉が一際高いと言える。

### 2.3 【構造体における構成部品の存在】を表すタイプ (=タイプC)

タイプAとタイプBは、時空間とモノ、および時空間とコトの関係を述べるタイプであったが、“有”構文のなかには、時空間を項にもたずに、二つのモノを項として、モノ対モノの関係を述べるタイプもある。たとえば、次の例のように、構造物の総体(X)とその構成要素(Y)の関係を捉え、「XにはYがある」という意味での〈存在〉を表すタイプがその一つである。これをタイプCと呼ぶことにする。

(29) 这 把 伞 有 42 支 伞骨。

これ CLF 傘 ある 42 CLF 傘の骨

[この傘(\*に/)には42本の骨があります。]

(30) 袋鼠 有 一 对 大 而 圆 的 耳朵。

カンガルー ある 1 CLF 大きい かつ 丸い PART 耳

[カンガルー(\*に/)には大きく丸い耳があります。]

(31) 他 有 那 个 高高的 鹰钩鼻子, 让人觉得难以接近。

彼 ある あれ CLF 高い 鷹鼻

[彼(\*に/)にはあの尖った鷹鼻があるから、近づき難い感じがします。]

「傘」と「骨」, 「カンガルー」と「耳」, 「彼」と「鼻」——それぞれの関係は、不可分に存在する「地」と「図」の関係と見立てることも可能であり、その点では、タイプAに属する(23)と(24)の「額」と「皺」あるいは「壁」と「ひび」の関係に類似する。しかし、タイプAでの「額」や「壁」がいずれも場所詞(“上”)を伴い空間化されているのに対して、タイプCでの「傘」「カンガルー」「彼」はいずれも一般名詞であり、あくまでもモノとして扱われている。また、「骨」「耳」「鼻」はいずれも具象的なモノであり、その点でもタイプAの存在対象に類似するが、構文

全体の意味としては、それぞれ「傘」「カンガルー」「彼」の恒常的な特性を語るものであり、その意味ではむしろ属性表現に近く、この点でも、出来事性の高い空間イベントを語るタイプAとは明確に異なる。事物の特性を語るには、それが特性であるという認識に至るまでの一定期間の観察や情報の獲得、さらには判断の過程というものが必要であり、事物の特性を語る属性表現とは、それらの過程を経たのちに形成された話し手の「知識」の言語化にほかならない。タイプAやタイプBが「知覚」の表現であるのに対して、タイプCは「知識」の表現であると言える<sup>3)</sup>。

#### 2.4 【範疇における成員の存在】を表すタイプ (=タイプD)

タイプC以上に「知識」表現としての性格が顕著に窺えるのが、次のような、特定の範疇における成員の存在を述べるタイプである。タイプDと呼ぶことにする。

(32) 豆浆 有 咸 的 和 甜 的。

豆乳 ある 塩辛い PART ~と 甘い PART

[豆乳 (\*に/) には塩辛いのと甘いがあります。]

(33) 京劇 的 旦 有 花旦、老旦、武旦。

京劇 PART 女形 ある 花旦 老旦 武旦

[京劇の女形 (\*に/) には「花旦」, 「老旦」, 「武旦」があります。]

いずれの文も、特定の範疇——“豆浆”[豆乳]と“京劇的旦”[京劇の女形]——に関して、それを構成する成員として複数の下位範疇が存在することを述べている。タイプCと同様に、モノとモノの関係が述べられてはいるものの、モノの抽象度がタイプCよりもはるかに高く、構文全体の意味は恒常的かつ概念的な事柄を述べており、実-時空間性や知覚性からは程遠い典型的な「知識」の表現であると言える。

上の2文では上位と下位のカテゴリー間の関係が述べられているため、

---

3) 「知覚」対「知識」という対立の着想は、定延利之氏の定延2001をはじめとする「体感」と「知識」に関する一連の議論に多くを負っている。

成員である存在対象は個体としてのモノではなく、類としてのモノが示されているが、範疇の成員は必ずしも類であるとは限らない。成員としての存在対象が個体である場合もある。たとえば次のような例である。

- (34) 那天 在 你 家 的 只 有 你 和 張大雷，  
あの日 居る あなた 家 PART ただ ある あなた ~と 張大雷  
并无他人了吧？（王朔《枉然不供》）

[あの日あなたの家に居たの（\*/／\*には／）はあなたと張大雷だけ（がいて）、他の人はもういなくなってたでしょう？]

この文では、“那天在你家的”[あの日あなたの家に居たもの]という主語名詞句によって問題の集合体すなわち範疇が提示され、述語において、その集合体を構成する複数の成員（“你和張大雷”[あなたと張大雷]）の存在が述べられている。「リスト」もしくは「一覧表」が主語で示され、それに該当する「メンバー」もしくは「項目」が述語で示されていると言い換えてもよい<sup>4)</sup>。存在対象である個々のメンバーは個体としてのモノであり、類ではないが、構文全体の意味として、特定の範疇における複数の成員の存在を述べているという点においては、(34)も(32)や(33)と同じタイプに属すると考えられる。

(34)では、主語名詞句の字義通りの意味によってリストそのものが明示的に提示されているが、リストが明示的ではない次のような例もある。

- (35) (= (13)) 家里情况挺好的，有一老人，有我爱人，有两个小孩儿。  
[家のなかはうまく行っていて、年寄りが一人いて、妻がいて、子供が二人いた。]

ここでは、“家里”[家のなか]という、字義通りに受け取れば「家のなか」という空間を表す場所詞句が主語に用いられているが、構文全体の意

4) 英語の there 構文にも同様の意味を表すタイプのものがあり、Rand & Napoli 1978では“list there-sentence”と呼ばれている。“list there-sentence”は、

Q. Who all has been in this room since closing time?

A. There's only the night-watchman. (Rand & Napoli 1978:301)

のように、定名詞句も生起し得るという特徴をもつ。

味としては、その空間表現“家里”が換喩として暗示する「家族」というリストのなかに「年寄り一人、私の妻、子供二人」という複数のメンバーが存在するという事柄が述べられている。

(35) は、場所詞句が主語であり、存在対象も具象的であるという点において、一見、タイプ A と同類のようにも見受けられる。現に、従来の記述は、このようなタイプの“有”構文を、タイプ A と区別することなく一括して「存在文」と呼んできた。しかし、この文は、“情況挺好的”[状況はたいへん良好である]という叙述からも明らかなように、家庭の経常的な状況を語ることを意図し、その一端として「家族」構成を述べるものであって、実-空間としての「家のなか」という即物的空間についての現場的、知覚的な存在イベントを述べるものではない。その点でタイプ A とは異なるタイプの構文であり、やはり「知識」を語る構文の一種であると言える。同様のことは次の(36)についても言える。

(36) (= (14)) 北大 中文系 有 郭锐, 沈阳, 袁毓林。

北京大学 中文学科 ある 郭锐 沈阳 袁毓林

[北京大学中文学科 (\*に/) には郭锐と沈阳と袁毓林がいます。]

“北大中文系”は前置詞の“在”や“到”の目的語になることが可能であることから明らかなように、品詞としては場所詞句に属するが、ここではリアルな物理的空間としての「北京大学中文学科」ではなく、「組織」としてのそれを意味している。そして、構文全体は、組織としての“北大中文系”が換喩する「教員リスト」において、当該の人物たちがそれを構成する「メンバー」として存在するという事柄を述べている。留意すべきは、ここでの“郭锐”“沈阳”“袁毓林”といった固有名詞は、生身の人間としての“郭锐”たちを指すのではなく、リスト項目としての名称を示しているということである。そのことは、(36)の発話者が視点を置く〈いま〉あるいは〈そのとき〉現在において、仮に“郭锐”本人たちが“北大中文系”に不在であり、上海に出かけていたとしても、(36)の発話は虚偽にはならないという事実からも裏付けられる。(36)は、組織という集合体の人員構成を述べる「知識」の表現であり、タイプ A のように、リアル

な時空間における現場的、知覚的な存在イベントを述べる構文とは性格が異なる。

(35) や (36) では、問題のリストの枠組みは、主語に用いられる語句の語彙的意味から推論が可能になるが、次の例のように、リストの枠組みが語用論的な了解に基づいて推論される場合もある。

(37) 甲：“澳大利亚 有 考拉。”

オーストラリア ある コアラ

[オーストラリア (\*に/／) にはコアラがいます。]

乙：“中国 有 四不像。”

中国 ある シフゾウ

[中国 (\*に/／) にはシフゾウがいます。]

(37) では、珍獣談義とでも呼ぶべき談話の脈略において、「珍獣リスト」なるものが対話者双方に共有される談話空間に設定され、そのリストに該当する項目として「オーストラリアにはコアラが存在」し、「中国にはシフゾウが存在する」といった情報交換がなされている。

問題の2文は、“澳大利亚”と“中国”という場所詞が主語に立ち、動物を表す名詞が目的語に用いられており、一見、タイプAの(18)と同型の「存在文」とも見受けられるが、ここでの“考拉”と“四不像”はともに総称としての「コアラ」と「シフゾウ」であり、(18)の“一只熊猫”のように個別の具象的な実体としての「コアラ」や「シフゾウ」ではない。抽象化されたカテゴリーとしての「コアラ」であり、「シフゾウ」である。そして、その抽象的なカテゴリーとしての「コアラ」や「シフゾウ」に対応する「オーストラリア」や「中国」も、当然のことながら、知覚的に捉えられたリアルな現場としての具象的な空間ではあり得ない。ここでの“澳大利亚”と“中国”は、珍獣リストの範囲を限定する〈抽象領域〉としての「オーストラリア」であり、「中国」であって、(18)の具象的な実-空間としての“铁笼子里”[檻の中]とは性格が明確に異なる。(37)の“有”構文は、場所詞を主語としながらも、構文全体の意味としては、先の(32)や(33)と同様に、恒常的、概念的な事柄を述べるものであり、他のタイプDの構文と同じく話し手が予め獲得している「知識」を述べ

る構文である。

## 2.5 【事物における相対的關係者の存在】を表すタイプ (=タイプ E)

タイプ C やタイプ D と同様に知覚的な時空間イベントしての存在を語らず、知識的な概念的な存在を語るタイプの“有”構文としては、さらに次のようなものもある。

- (38) 他 以前 有 李宁 这 个 竞争对手, 还比较卖力。  
 彼 かつて ある 李寧 これ CLF ライバル  
 [彼 (\*に/) にはかつてこの李寧というライバルがいたので、  
 わりと頑張っていました。]

- (39) 我 有 三 个 表哥。  
 私 ある 3 CLF 従兄  
 [私 (\*に/) には3人の従兄がいます。]

- (40) 太阳 有 八大行星。  
 太陽 ある 八大惑星  
 [太陽 (\*に/) には8つの惑星があります。]

“竞争对手” [ライバル], “表哥” [従兄], “行星” [惑星] はいずれも参照点なくしては存在し得ない非自律的な相対的關係者を表す語彙であり、上の3文はいずれも、主語名詞が表す事物 X について、何らかの相対的な関係にある事物 Y が存在するという事柄を述べている。存在対象の“李宁这个竞争对手”, “三个表哥”, “八大行星”は、それぞれ事実としては具象的な人や物に対応しているが、構文全体の意味としては、事物 X を対象に、事物間の関係性に着目した恒常的、概念的な特性を語るものであり、その意味において、このタイプもまた「知識」の表現であり、属性表現の一種であると言える。これをタイプ E と呼んでおく。

## 2.6 【所有物としての存在】を表すタイプ (=タイプ F)

いわゆる〈所有〉を表す次のようなタイプの“有”構文も、タイプ E と同様、時空間イベントしての存在を語らないタイプの一つである。

- (41) 爸爸 有 两 台 电脑。



お父さん ある 2 CLF パソコン

[お父さん (\*に／) にはパソコンが2台あります (お父さんはパソコンを2台もっています)。]

(42) 我 有 这 本 词典。你有吗？

私 ある これCLF 辞書

[私 (\*に／) にはこの辞書があります (私はこの辞書をもっています)。きみはありますか？]

上の2文はともに、具体物が特定の人物の所有下に存在するという事柄を述べている。従来から〈所有〉を表す構文と呼ばれているこの種の“有”構文をここではタイプFと呼ぶことにする。

タイプFは、英語のhave構文とは異なり、意志性のある行為としての〈所有〉を表しにくい。欲求文としての(43)や命令文としての(44)が不自然であることから窺えるように、“有”構文が表す〈所有〉は、「行為」としてのそれではなく、持続的もしくは経常的な「状況」としてのそれと理解されるべきである。

(43) \*我 很 愿意 有 电脑。

私 とても ~したい ある パソコン

[\*私にパソコンがほしい。]

(44) \*你 尽量 早些 有 电脑!

あなた できる限り 早めに ある パソコン

[\*あなたになるべく早くパソコンがほしい!]

先の(42)の例では、たまたま話し手の発話現場に位置する「この辞書」が存在対象として扱われているが、構文全体の意味としては、発話現場において知覚された即時的な存在イベントが語られているのではなく、「私」と「この辞書」の間に所有関係が成立しているという概念的な事柄が述べられている。何か誰かに〈所有〉されているという事実の認定は、事物の特性の認定と同じく、一定期間の観察や知的根拠に支えられた「知識」の発現にほかならず、(42)のような例も含めて、〈所有〉を表すタイプの“有”構文はすべて「知識」の表現であると言える。

## 2.7 【事物における質的属性の存在】を表すタイプ (=タイプ G)

実-時空間における知覚的な具象物の存在を語らないタイプの“有”構文としては、さらに次のようなタイプのものもある。次の2文は、主語名詞の表す事物に何らかの恒常的な性質や特性が存在するという事柄を述べている。

(45) 吸烟 有 这些 坏处。

喫煙 ある これら 弊害

[喫煙 (\*に/／) にはこれだけの弊害があります。]

(46) 他 有 酗酒 的 毛病。

彼 ある 泥酔する PART 悪習

[彼 (\*に/／) には泥酔する悪い癖があります。]

特定の事物についての質的属性の存在を述べるこの種の“有”構文を仮にタイプGと呼ぶ。タイプGは文字通りの属性表現であり、言うまでもなく「知識」の表現である。

## 2.8 【事物における量的属性の存在】を表すタイプ (=タイプ H)

タイプGの質的属性に対して、仮にタイプHと呼ぶ次のタイプは、特定の事物に内在する量的属性の存在を述べるタイプと言える。

(47) (= (3)) 他 有 一 米 八。

彼 ある 1 CLF 8

[彼は (\*に/\*には) は1メートル80 (\*が) あります。]

(48) 长江 有 6211 公里。

長江 ある 6211 キロメートル

[長江 (\*に/\*には) は6211 キロメートル (\*が) あります。]

(49) 一年 有 十二 个 月。

一年 ある 12 CLF 月

[1年 (\*に/\*には) は12ヶ月 (\*が) あります。]

(50) 他 有 七十 多 岁。[彼は70余歳です。]

彼 ある 70 余り CLF

数量的限定の表現を項 (argument) と認めることの是非については議論の余地もあり得るが、ここでは量的属性を抽象性の極めて高い存在対象とみなし、この種の構文をひとまず2項から成る“有”構文のうちの一つのタイプと数えておく。いずれにせよ、このタイプがタイプGと同様、典型的な属性表現であり、「知識」の表現であることは言を俟たない。

以上、2項から成る“有”構文を、主として意味論的な観点から8つのタイプに分類し、それぞれの特徴を観察した。いま、当面の関心事である存在対象の定性 (definiteness) の問題に着目して、これら8つのタイプを振り返ってみると、タイプA, B, Hを除く他の5つのタイプにはすべて目的語に定名詞句が用いられてもよいという事実が明らかになる。タイプCの(31), Dの(34), (35), (36), Eの(38), Fの(42), Gの(45)には、それぞれ指示詞、代名詞、固有名詞のいずれかから構成される定名詞句が目的語に用いられ、それぞれの存在対象を示している。つまり、タイプCからタイプGの5つのタイプは、談話環境に応じて、定的な事物の存在を述べることも、不定の事物の存在を述べることも可能だということである。

それに対して、タイプA, B, Hでは、談話環境の如何に拘わらず、存在対象を表す目的語に定表現を用いることはつねに不自然に感じられる。このうち、そもそも定不定の対立が有意性を持ち得ない量的属性を目的語とするタイプHを別にすれば、当面の議論の対象になり得るのはタイプAとタイプBの2タイプのみとなるが、この2タイプはつねに不定の対象の存在を語るものでなければならない。先に挙げた(17)から(28)の例の目的語を定名詞句に置き換えた文はすべて非文となる。すでに1の節でも触れたが、仮にいま、話し手にとって既知の対象である“陵陵”[リンリン]が、話し手の眼前の「檻の中」というリアルな空間において寝そべっていることを知覚したからといって“\*鉄籠子里有陵陵。”と発話することは不自然であり、また、「私の靴」が眼前の「植木鉢のそば」というリアルな空間に転がっていることを知覚したからといって“\*花盆旁边儿有我的皮鞋。”と発話することは不自然だということである。従来の、

「存在文」の目的語は不定名詞句でなければならないという指摘があてはまるのは、まさしく、この、タイプAとタイプBの2タイプにほかならない。これまで「存在文」として一括されてきた時空間詞（句）を主語とするタイプの“有”構文のうち、目的語がつねに不定表現でなければならないのは、リアルな時空間におけるリアルなモノもしくはリアルなコトの存在を述べる知覚的な存在表現のタイプのみということである。一方、リアルな時空間を場とする知覚的な存在イベントを語らないタイプ、すなわち「知識」の表現に属するタイプの「存在文」については、たとえばタイプDの(35)や(36)のように、定表現が目的語に用いられることも可能だということである。

このように、タイプAとタイプBは、談話環境の如何に拘わらず、存在対象を表す目的語がつねに不定表現でなければならないという点において、「特殊」な“有”構文であり、「特殊」な「存在文」であると言える。この、真に「特殊」な2つのタイプの“有”構文を、他の「存在文」——すなわち、他の“有”構文と同様に「知識」の表現に属するタイプの「存在文」——とは区別し、木村2011に倣って「時空間存在文」と呼ぶことにする。

リアルな時空間における知覚的な存在イベントを語る時空間存在文は、存在対象を表す名詞句に数量詞の付加を求める度合いが著しく高い。これまで明確な指摘を見ないが、総称として存在対象に言及する場合は、時空間詞（句）を主語とする“有”構文であっても——すなわち、従来の枠組みで言うところの「存在文」であっても——、裸名詞が目的語に用いられることは、タイプDの(37)がそうであるように、なんら問題はない。逆に、リアルな時空間における具象的な個別の事物の実体的存在を語る時空間存在文では、抽象的な総称としての事物が扱われる余地はなく、従って、裸名詞による総称表現が目的語に用いられることはあり得ない。勢い、数量詞を伴う名詞句が用いられる頻度が高くなる。

とは言え、タイプAの(20)やタイプBの(25)のように、時空間存在文にも裸名詞が用いられる例が現実には存在する。この点も含めて、次節では、木村2011に沿って、時空間存在文の特性を確認し、“有”構文と

いう構文カテゴリー全体のなかでの位置取りを明らかにしたい。

### 3. 「時空間存在文」の特性

木村 2011 は、時空間存在文がリアルな時空間にリアルな個体としての物や人が実体として存在することを表す構文であり、かつ、その物や人を表す目的語はつねに不定表現でなければならないという構文的事実を踏まえて、時空間存在文の意味機能を「実-時空間におけるリアルな〈非既知〉的物事の実体的存在を言い立てる文」とであると特徴づける。以下、本節では、木村 2011 に沿って、時空間存在文の特性に関する詳細を確認する。

#### 3.1 非既知性について

話し手（または聞き手）の脳裏には特定の物事——人，物，事——が既知の対象として数多く存在する。すなわち、既知の物事が知識として登録されている。そのあらゆる既知の物事のいずれとも一致同定（identification）が成り立たず、従って、話し手（または聞き手）にとっては「どこの誰」とも「どこのなに」とも「誰のなに」とも同定できない非既知（unidentifiable）の「誰か」あるいは非既知の「なにか」——すなわち未知なる対象——が、とにもかくにも実体として「存在する」ということを述べ立てる文、それこそが時空間存在文である。

先の (25) のような気象現象の表現は、時空間存在文における存在対象の非既知性を最も象徴的に反映していると言える。話し手が〈いま、ここ〉あるいは〈そのとき、その場〉において知覚し、言語化しようとする「雨」は、話し手にとっては初めて遭遇する非既知の「雨」でしかあり得ない。〈いま、ここ〉に、あるいは〈そのとき、その場〉に降る雨は、さきほど降ったその雨と同一の雨ではあり得ず、前日に降ったあの雨と同一の雨でもあり得ない。雨や雪や風は、知覚者にとってはつねに一期一会の存在であり、その意味で、〈いま、ここ〉あるいは〈そのとき、その場〉に降る雨は、話し手にとってつねに未知なる対象であると言える。その、話し手の知識のなかに登録されている「その雨」や「あの雨」のうちのどれとも一致同定しない非既知の「雨」の存在を述べているのが (25) の時空間存

在文である。

このように、話し手（または聞き手）が、〈いま、ここ〉で、あるいは〈そのとき、その場〉で初めて遭遇する個別の対象について、その実体の〈存在〉を主張することそれ自体を目的とする時空間存在文は、当然のことながら、〈存在する〉ことがすでに了解済みの事物、すなわち話し手（または聞き手）の知識のなかにその存在がすでに登録済みである既知的事物とは相容れない。定表現で述べられる事物とは、〈存在する〉ことがすでに了解されているその事物にほかならない。「〈存在する〉ことをすでに知っている）その事物が〈存在する〉」と述べることは明らかにトートロジーであり、不自然である。“\*铁笼子里有陵陵。”や“\*花盆旁边儿有我的皮鞋。”が不自然な表現として許容されないのは当然のことである。

一方、「知識」の表現に属するタイプDの(35)や(36)のような「存在文」においては、実体としての〈存在〉が了解済みである既知の事物が存在対象となることも可能である。(35)や(36)では、談話内に設定された「家族リスト」や「教員リスト」といった特定の限定的な概念カテゴリーのなかにそのメンバーとして誰が〈存在〉するかが語られている。「〈存在する〉ことをすでに知っている）その事物が、特定のリストのなかに〈メンバーとして存在する〉」と述べることはトートロジーではなく、有意な情報であり、従って、既知の人物が取り上げられても何ら問題はない。時空間存在文が主張する事物それ自体の実体的な〈存在〉と、他の「存在文」が主張する特定の範疇における概念的な〈存在〉とでは、〈存在〉の意味が本質的に異なる。従来の「存在文」の不定性に関する記述の不明確さは、こうした視点の欠如に起因すると考えられる。

### 3.2 「所在文」との相違

仮にいま、眼前の檻の中に一頭のパンダが寝そべる姿を目撃したとする。中国語の話し手は、そのパンダが、自らの知識内に登録されているすべての既知のパンダのいずれと一致するかを瞬時にサーチし、もし、いずれの既知のパンダとも一致同定が成り立たないと判断すれば、時空間存在文を用いて“铁笼子里有一只熊猫。”と表現する。

では、同定が成立すればどうか。眼前のパンダが、かつて新聞報道でその存在を知った“陵陵”[リンリン]であると同定できれば、その時は、話し手は(51)のように表現する。

(51) 陵陵 在 鉄籠子里。[リンリンが檻の中にいます。]

リンリン いる 檻-なか

(51)は、“陵陵”を主語とし、動詞句“鉄籠子里”を述語とするいわゆる「所在文」である。所在文とは、一般の動詞述語文と同様に、「主語－述語」の語順で構成され、〈存在する〉ことを話し手（または聞き手）がすでに了解している既知の事物について、それが「特定の空間に定位している」あるいは「特定の空間に位置している」という状態を述べるための構文である。所在文が意味するところは、主体として主語に立てた既知の事物について、それがいかなる運動をし、あるいはいかなる変化を起こし、あるいはいかなる状態にあるかを述べる一般の動詞述語文のそれと同類である。つまり、事物が既知のものであれば、中国語では、それを状況の主体として捉え、それを主語に立て、述語によってその状況を述べるという構文形式を以って事物と空間との関係を語ろうとする。

一方、〈いま、ここ〉で、あるいは〈そのとき、その場〉で初めてそのものの〈存在〉を知り得た事物、すなわち非既知の事物については、周知の通り、所在文を用いることはできない。“\*一只熊猫在鉄籠子里。”は非文である。非既知の事物については、“有”構文に属する時空間存在文を用いる。この点が、事物の既知・非既知の対立に関わらず、(11)と(12)のように同一の構文を用いることのできる日本語とは決定的に異なる。中国語では、非既知の対象の〈存在〉を語るための構文が、時空間存在文という、所在文とは異なるかたちで用意されている。中国語は、非既知の対象の〈存在〉と、既知の対象の〈空間所在〉を構文上差異化する言語であり、日本語は差異化しない言語である。

時空間存在文と所在文の相違を一言で言えば、前者は、「これまで（あるいは、それまで）存在することを知らなかったある事物が存在する」ということを述べる構文であり、後者は「存在することをすでに知っている特定の事物が、特定の空間に定位している」ということを述べる構文であ

る、と言える。二つの構文は本質的に意味機能を異にする。

### 3.3 数量詞の付加について

2の節の最後でも述べたように、総称表現に対応する抽象的な類の事物の存在を述べる場合は、「存在文」であっても、裸名詞が目的語に用いられてなんら問題はない。一方、具象的な個別の事物の実体的存在を述べる場合は、事物の個別性を明示する必要から、時空間存在文に限らず、“有”構文一般に、数量詞が目的語名詞に付加される傾向が強くなる。(35)の“两个小孩儿”や(41)の“两台电脑”の例がそれである。数量詞が担う個別化もしくは個体化(individualization)の機能については、夙に大河内1985が指摘する通りである。もとよりリアルな時空間における具象的な個別の事物の実体的存在を語る時空間存在文においては自ずと数量詞付加の度合いが高くなる。加えて、時空間存在文については、以下に述べる機能論的な特性によっても個別化の明示が一際強く求められる。

時空間存在文が現実運用されるコンテキストを機能論的な観点から観察してみると、主として二つの用法をもつことが見て取れる。一つは、聞き手(あるいは読み手)の視覚的なイメージに訴えつつ、リアルな時空間上における場の情景を具象的に叙述しようとする、いわゆる叙景的な用法である。典型例として、次のような例が挙げられる。

- (52) ……瓶子里水不多, 瓶口又小, 乌鸦喝着水。怎么办呢? 乌鸦看见 旁边 有 许多 小石子, 想出了一个办法。(《小学語文》)
- そば ある たくさん 小石

[……瓶の中は水が少なく、瓶の口も小さくて、カラスは水を口にすることができない。さてどうしたものか? カラスはそばに たくさんの石ころがあるのを見て、ある方法を思いついた。]

下線部の時空間存在文は、“乌鸦”[カラス]の視覚が捉えたリアルな眼前の情景を叙述している。叙景の用法の成立は、表現対象の視覚性もしくは形象性を拠り所とするものであり、その視覚性もしくは形象性を補完し、保証する上で、当該の存在対象に個別の実体としての輪郭を与えることは有効な方略となる。数量詞による個体化機能はその輪郭化(profiling)



に大きく貢献する。逆に、数量詞を伴わない裸名詞は、存在対象の個別の実体としての輪郭に乏しく、視覚性や形象性が保証されなくなる。(52)の下線部から数量詞の“许多”を落とすことは極めてむずかしい。同様の理由で、“小龙”が部屋に入った瞬間に目の当たりにする情景を語る次の例では、“电脑”が数量詞の“一台”を伴わない(53a)の方が、(53b)に比べて明らかに許容量が低くなる。数量詞の個体化機能は、時空間存在文の叙景的用法の成立に大きく与っていると考えられる。

- (53) a. <sup>??</sup>小龙一进门就看到饭桌上有电脑。  
 b. 小龙一进门就看到饭桌上 有 一 台 电脑。

食卓-上 ある 1 CLF 子供

[小龍が中に入ると、食卓の上に一台のパソコン台があった。]

時空間存在文のもう一つの代表的な用法は、話し手（または聞き手）にとって非既知の事物を談話の中に新規に導入し、あとに続く叙述の主題に据えるという用法である。仮に「新規主題設定」の用法と呼ぶことにする。とりわけ時間詞（句）を主語とするタイプの時空間存在文は、ほとんどの場合がこの用法で用いられる。先に挙げた(22)はその典型的な一例と言える。

- (22) 从前有个小朋友，他的眼睛里面起麦粒肿了，于是他去医院动手术，……

(22)の下線部は、先の(52)の下線部のように特定の場の情景を叙述しようとするものではない。(22)では、聞き手（または読み手）にとって非既知の対象である「一人の少年」（“（一）个小朋友”）が下線部の時空間存在文によって談話内に新規に導入され、後続の“他的眼睛里面起麦粒肿了”以下で、その少年を主題とする一連の叙述が展開されている。談話内に新たに導入され、同時に、後続叙述の主題として卓立させられる対象にとって、それを輪郭化することは、対象を焦点化する上で重要な作業であり、ここでも数量詞による個体化機能が有効に機能している。試みに(22)の時空間存在文の目的語を裸名詞の“小朋友”に置き換えた(22)'は明らかに不自然である。

- (22)' <sup>??</sup>从前有小朋友，他的眼睛里面起麦粒肿了，于是他去医院动手术

術, ……

数量詞は、自らの個体化機能によって存在対象の卓立化を促す効果を持ち、時空間存在文の新規主題設定の用法にも重要な役割を担っている。

このように、時空間存在文の目的語名詞が極めて高い頻度で数量詞を伴うという現象には、主として二つの機能論的な用法が関与していると考えられる。なお、急ぎ付け加えるべきは、上に述べた事柄は、当該の存在対象が限界的 (bounded) もしくは離散的 (discrete) な非連続体としての事物である場合のみ該当するものであり、非限界的、非離散的な連続体の事物についてはその限りではない、ということである。次の (54) は《小学語文》からの引用であり、先の (52) で省略した前段部分 (= (20)) を復元したものであるが、注目すべきは、“旁边有许多小石子”の“小石子”とは対照的に、“瓶子里有水”の“水”には数量詞が付加されていないという点である。

(54) 乌鸦看见一个瓶子，瓶子里有水。可是，瓶子里水不多，瓶口又小，乌鸦喝着水。怎么办呢？乌鸦看见旁边有许多小石子，想出了一个办法。(《小学語文》)

[カラスには一本の瓶が見えた。瓶のなかに水がある。だけど、瓶の中は水が少なく、瓶の口も小さくて、カラスは水を口にすることができない。さてどうしたものか？カラスはそばにたくさんさんの石ころがあるのを見て、ある方法を思いついた。]

“旁边有许多小石子”と同様に叙景的用法で用いられている“瓶子里有水”ではあるが、存在対象が非離散的な連続体である“水”であれば、このように裸名詞であっても別段不自然には感じられない。同様のことは、(25)の“雨”や(26)の“雪”についても言える。時空間存在文であっても、存在対象が離散性や限界性に乏しい連続体であれば、数量詞の付加は必ずしも必要とされない——つまり裸名詞であることも許容される——ということである。

最後にもう一点付言すれば、叙景的用法と新規主題設定の用法のどちらでもなく時空間存在文が用いられる場合は、たとえ存在対象が限界的、離散的な非連続体の事物であっても、数量詞の付加を必要としない。たとえ

ば次のような場合である。

(55) 候车室里 有 电脑。你可以过去上网查查看。

待合室-なか ある パソコン

[駅の待合室にパソコンがあるから、ネットで調べて来るといい。]

ここでの時空間存在文は、所謂報告文であり、聞き手にとって非既知のパソコンが駅の待合室に存在するという状況を、単に事実として聞き手に伝えることを目的とするものである。当該のパソコンを新たな主題に据えて更なる叙述を後続文において展開しようとするものでもなければ、聞き手の視覚的イメージに訴えて、待合室の情景を具象的に叙述しようとするものでもない。このように叙景的用法と新規主題設定の用法のどちらでもなく、単なる報告文として用いられる場合の時空間存在文については、存在対象が限界的、離散的な非連続体の事物であっても、数量詞による個別化の明示を必ずしも必要とはしない。すなわち裸名詞であってもよいということである。

以上、本節では、木村 2011 に沿って、存在対象の非既知性とそれに関わる目的語名詞の不定性に関する問題および目的語名詞の数量詞付加に関する問題の2点に焦点を当てつつ、時空間存在文の特性を意味と機能の面から確認した。時空間存在文は、話し手（または聞き手）にとって非既知であるリアルな事物の実-時空間における実体的存在を述べるというそれ自身の構文的意味を反映して、その目的語にはつねに不定表現が用いられる。一方、目的語における数量詞付加の必要性は機能論的な要因に左右される傾向が強く、時空間存在文であれば目的語はつねに数量詞を伴うというものではない。一般に、叙景的用法と新規主題設定の用法で用いられる時空間存在文において離散的、限界的な事物の存在が述べられる場合には数量詞付加の要求度は高くなる。

#### 4. むすび

従来、一部の“有”構文は、一般名詞ではなく時空間詞（句）が主語の

位置に立ち、加えて、目的語が一般に数量詞を伴う不定表現から構成されるという2点を根拠に「特殊」な構文として位置づけられ、「存在文」の名称のもとに一括されてきた。本稿は、その「存在文」の特徴を、2項から成る“有”構文全体のなかで見直し、目的語がつねに不定表現であるという特徴は、「知覚」タイプの「存在文」、すなわち、実-時空間におけるリアルな非既知的事物の存在を言い立てるタイプの「存在文」にのみ限られた特徴であることを明らかにした。加えて、その、リアルな時空間における個別の実体の存在を語るタイプの「存在文」を「時空間存在文」と名づけ、その意味的および機能的特性を明らかにした。

2の節での観察からも窺えるように、概ね“有”構文の主語と目的語に配置される二つの項の間には、程度の差を含みつつも、一定の支配関係を見て取ることができる。主語の位置に据えられる項がより支配者的であり、目的語の位置に置かれる項がより被支配者的である。前者が主体的であり、後者が非主体的であると言い換えてもよい。タイプFにおける所有者と被所有物の関係はその典型と言えるが、他のタイプについても、属性主と属性の関係や、構造物の総体と構成部位の関係、上位カテゴリーと下位カテゴリーの関係、リストと項目の関係など、濃淡の差こそあれ、いずれも広義に〈一方が一方を所有する〉という支配者と被支配者の関係もしくは主体と非主体の関係で捉えることが可能なものと考えられる。言い換えれば、“有”構文という2項文は、タイプFを典型として、より典型的なタイプからより周辺的なタイプまでを取り込みつつ、広く〈所有〉の意味で捉えられる事態を表す構文カテゴリーであると理解することもできる。

そして、問題の時空間存在文もまた、目的語の不定性においてやや「特殊」であるとは言え、構造的には“有”構文のなかの一つのタイプにはかならない。そのことは、中国語においては、非既知的事物は、存在イベントの主体としてではなく、時空間に広義に〈所有〉される——言い換えれば、広義に支配される——非主体的な対象として概念化されているということの意味するとも考えられる。既知の事物が所在文の主語に立ち、イベントの主体として概念化されることは対照的である。大西 2011 によれ

ば、上古前期の漢語においては“有”構文は専ら〈所有〉を表し、現代語の時空間存在文に相当する〈存在〉の用法は上古後期以降に〈所有〉の用法から拡張したものであるとされる。〈存在〉が〈所有〉に帰属する（もしくは由来する）という状況は、現代中国語においても同様と見てよい。

〈参考文献〉

- 木村英樹 2011. 「「存在文」が表す〈存在〉の意味および‘定不定’の問題」『汉语与汉语教学研究』第2号：3-15.
- 刘月华等 1983. 『实用现代汉语语法』北京：外语教学与研究出版社.
- 大河内康憲 1985. 「量詞の個体化機能」『中国語学』232：1-13.
- 大西克也 2011. 「所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——」『汉语与汉语教学研究』第2期：16-31
- Rand, Emily and Donna Jo Napoli 1978. Definites in *There*-sentences. *Language* 54:300-313.
- 定延利之 2001. 「情報のアクセスポイント」『言語』第30巻, 第13号：64-70.